

外国人日本語学習者の日本語発音不安尺度作成の試み ——タイ人大学生の場合——

小河原義朗*

キーワード: 日本語発音不安, 日本語発音不安尺度, タイ人大学生, 他者評価, 発音学習スキル

要旨

本研究は、教師が事前に外国人日本語学習者の発音不安を把握するために用いることのできるような「日本語発音不安尺度」の開発を試みることを目的とする。

発音不安について聞く58項目からなる質問紙を作成し、タイの大学で日本語を学習する来日経験のない学部学生357名を対象に質問紙調査を実施した。

因子分析の結果、「発音学習スキルの欠如」「日本でのクラス場面における他者評価」「日本でのクラス場面における発音学習スキルの欠如」「他者評価」「自他比較」の5因子が抽出され、発音不安が生じる場面は、現在のタイでのクラス場面と、日本でのクラスを想像した場面の大きく2つに分類された。不安要因としては、場面による影響はあまり見られず、発音学習・改善のためのスキルがないことによる「発音学習スキルの欠如」、他の学習者による評価や存在を意識することによる「他者評価」「自他比較」に起因する発音不安を抱えていることが示唆された。

そして、各因子項目から6項目ずつを選定し、タイ国内版3下位尺度18項目、日本国内版2下位尺度12項目からなる尺度案を提示した。下位尺度の信頼性、下位尺度間の相関、学習歴・発話量・自己評価得点との関係などを検討した結果、この尺度が十分使用に耐えることが示された。

1. 問題と目的

日本語教育における音声教育の重要性が指摘され、音声教育シラバスや学習者の音声学習上の問題点が母語別対照分析や音響音声学的分析などを通して分節音素・超分節音素の両面から検討が進められている。同時に、それらの知見をどのように教えるかという効果的な発音指導法や音声教育教材の開発・研究も進められるようになった。しかし、学習の主体が学習者である以上、そのような研究成果を実際のクラスに導入し十分に発揮させる上で、学習する側の心理的な側面、つまり学習者の発音学習上の社会心理学的な問題点についてもおさえておく必要がある。例えば、発

* OGAWARA Yoshiro: 国立国語研究所日本語教育部門研究員。

音指導・矯正の際に発音不安から恥ずかしがる、緊張状態に陥って十分な発音練習ができない、練習に主体的に取り組もうとしない、矯正やモデル発音の繰り返しを拒絶するなどの学習者が見られるが、一度拒否反応が出てしまうと指導の継続に支障を来すだけでなく、学習者やクラス全体の発音学習に対する動機づけや雰囲気にも悪影響を及ぼしてしまう。

第二言語の学習や習得研究において、学習者の不安はこれまで意欲・感情などの情意的要因の一つとして取り上げられてきた。学習に効果的な適度の緊張感を超えた過度の不安は、インプットからアウトプットの過程での認知的阻害や学習回避行動などを引き起こし、第二言語習得に負の影響を与えることが示唆されている(Scovel 1978; Tobias 1986; MacIntyre & Gardner 1989, 1994 など)。そして、第二言語習得における不安の概念的検討が進み、学習者のパーソナリティ、性格特性としての不安だけでなく、第二言語習得に特定の関わる状況によって生じる不安として、コミュニケーション不安、テスト不安、スピーチ不安などが検討されている(Young 1986; Daly 1991; Horwitz & Young 1991 など)。日本語教育においても近年、倉八(1994)、池田(1997)、元田(1999)など不安を取り上げた研究が進められている。

一方、発音学習や習得に特定の関わる発音不安については、第二言語習得研究や ESL 研究などにおいてその指導上の重要性が指摘されてきたが(Stevick 1978; Rivers 1981 など)、日本語音声教育研究では発音不安は発音指導上の問題点として指摘されている(河野 1999 など)ものの、具体的な検討はなされておらず、「教師は心にとめて教室に入るのがよい」(大坪, 水谷 1971 など)というにとどまっている。しかし、発音指導技術や教材の効果は、学習者が自ら主体的に発音学習に取り組むような環境・クラス内の雰囲気作りや動機づけが前提なのであり、教師はそれが十分に発揮できるようなクラス運営をまずは心がける必要がある。その意味で、発音不安といった学習者の発音学習上、さらには発音指導上影響を与える要因の実態を情報として教師が事前に把握しておくことは重要であり、指導上の助けとなる。

これまで第二言語の学習や習得に特定の関わる学習者の不安を把握する手段として、質問紙法による尺度が作成されてきた。Horwitz, Horwitz & Cope (1986) の「FLCAS (Foreign Language Classroom Anxiety Scale)」, MacIntyre & Gardner (1988) の「FCA (French Classroom Anxiety) / FUA (French Use Anxiety)」, 日本語教育においても元田(1999)の目標言語使用環境における教室内外の不安を扱った「第二言語不安尺度」などがあり、習得との関係が検討されている。日本語音声教育においても、発音学習に特定の関わる不安を測定する尺度を作成し、学習者の不安を事前に把握することによって、例えば発音不安をあまり感じず、発音学習に積極的な学習者を中心にクラス活動を検討する、発音不安の強い学習者にいきなり発音矯正を行って動機づけに悪影響を及ぼすことを避けるなど、学習者の不安の程度やその要因に応じた対処法を考えることができる。

以上から、本研究では日本語の発音・指導・矯正場面における学習者の発音不安の実態を明ら

かにし、それを教師が事前に把握するための「日本語発音不安尺度」の開発を試みる。ここでの「日本語発音不安」とは、日本語の発音学習に特定の関わる不安を包括的に捉えるために、Leary (1983) の対人不安の定義をもとに、「現実の、あるいは想像上の日本語発音場面・発音指導場面において、日本人・教師・クラスメートなどの他者からの発音評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安」と定義する。

2. 方 法

2-1. 予 備 調 査

まず学習者はいつどのような発音不安を感じているのかについて具体的に把握するため、留学生 25 名(出身は中国, 韓国, 台湾, マレーシア, タイ, アメリカ, ブルガリア, モンゴル, オーストラリアで, 3 年以上の日本語学習歴をもつ者)に対する個別インタビュー調査を行った(詳細は, 小河原, 1999)。

その結果, 発音不安が生じる場面として, 表 1 のように ① 母国での日本語クラスにおける発音・矯正場面, ② 日本国内での日本語クラスにおける発音・矯正場面, ③ 日本国内での日本人とのコミュニケーション場面, ④ 日本国内での外国人とのコミュニケーション場面の 4 つに分類された(() 内の数字は人数)。そして, 同じ学習者でも, 各場面で関係する要因が異なり, この関係は学習段階によっても異なるため, 発音不安の現れ方は様々に変化する。全体としては, 発音不安を強く感じる学習者は, 他の学習者の発音と自分の発音とを比べることが多く, 他者からの評価をそれ以外の要因よりも重視し, また発音学習・発音改善のためのスキルが身につけていないことからくる不安を抱えている傾向がみられた。逆に, 発音学習に対する動機づけが高く, 自律性が明確な学習者は, 発音不安を感じておらず, 発音指導の不足を不満に感じていることから, 発音学習への自律性を高める指導が発音不安解消の一手段と考えられる。

しかし, こうした自律性に影響を与えると思われる学習者の「発音学習に対する重要性意識」は, 時系列的に「低 → 高 → 低 → 高」の N 字曲線のように変化している傾向が見られ, この変化は上記 ①～④ の場面とほぼ対応しているようである(図 1)。すなわち, 母国ではあまり発音指導がなされない → そのため, 来日前は発音の重要性について判断できない(低)が, 来日して自分の発音が十分通じないため, 発音の重要性に気づく(高) → しかし, 日本でも発音指導や評価が不十分であり(谷口 1992 など), さらに一般の日本人が誉めるだけで正確な評価をしないことから, 発音学習に対する動機づけやその重要性意識が次第に低下していく(低) → 滞在期間が長くなるにつれて日本人評価が厳しくなる(岩男, 萩原 1988; 小河原 1993 など), あるいは社会生活上十分な発音能力が要求されることから, その重要性に改めて気付き, 発音学習に対する動機づけが再び上昇する(高)という変化である。この点については, 上野 (1992) が「もし, 早期に

表 1 発音不安が生じる場面とその要因

場面 ①: 母国での日本語クラスにおける発音・矯正場面	
発音不安が生じる要因	発音不安が生じない要因
<ul style="list-style-type: none"> ● 他者の存在 (8) ● 自他比較 (8) ● 原因帰属 (5) ● 発音改善スキルの欠如 (5) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 発音に対する向上心 (13) ● みんなできない (4) ● クラスメートとの距離・雰囲気 (4) ● 他者評価の高さ (2) ● 発音の非重要性 (11)
場面 ②: 日本国内での日本語クラスにおける発音・矯正場面	
<ul style="list-style-type: none"> ● 自他比較 (10) ● 発音改善スキルの欠如 (7) ● 自信喪失 (4) ● 自尊心 (3) ● 教師の指導 (3) ● クラスメートとの距離・雰囲気 (2) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 発音に対する向上心 (4) ● 下手な人の存在 (3) ● 他者評価の高さ (2) ● できなくて当然 (2)
場面 ③: 日本国内での日本人とのコミュニケーション場面	
<ul style="list-style-type: none"> ● 発音改善スキルの欠如 (8) ● 自信喪失 (7) ● コミュニケーションの不通 (7) ● 聞き返しに対する不安 (7) ● 誤解に対する恐れ (4) ● 経験不足 (3) ● 発音能力の低さ (2) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 発音に対する向上心 (6) ● 評価の欠如・誉める日本人 (8) ● コミュニケーションの成立 (3) ● 発音の非重要性 (3) ● 他者評価の高さ (3)
場面 ④: 日本国内での外国人とのコミュニケーション場面	
<ul style="list-style-type: none"> ● 自己発音レベルの露呈 (7) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 発音に対する向上心 (3) ● 他者評価の高さ (2)

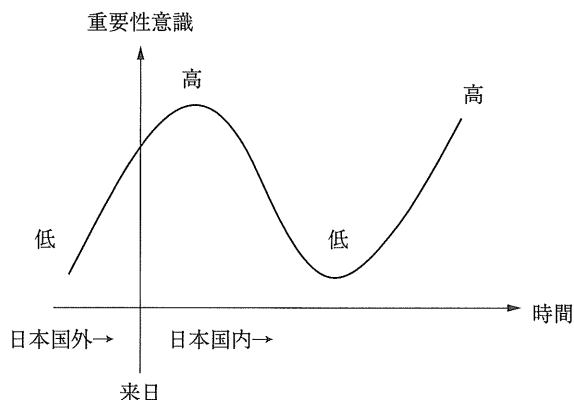


図 1 発音重要性意識の変化

音声面の学習を軽視し、自己流の発音で進めるならば、後の段階でこれを矯正しようとしても容易にできるものではない。学習が進めばそれだけ自己流の発音が定着し、また、文法・語彙等の音声面以外の学習項目も増え、音声面の矯正にさく時間の余裕もなくなってしまう」と指摘しているように、学習段階の観点からなるべく早い時期での指導が重要であると考えられる。このことから、これと同じように来日して日本語を学習する学習者に対しても、動機づけがまず高くなる「来日直後」の時期を逃さず指導することが非常に重要であると言える。

そこで、本研究ではまず母国での日本語学習の後來日し、これからクラスに入るという学習者を想定して、その発音不安の実態を明らかにし、そのような学習者の発音不安を把握するための尺度作成を目指す。そのために、小河原(1999)の結果をもとに質問項目を作成し、日本国外で学習している来日経験のない日本語学習者を対象として質問紙調査を実施する。その結果に項目分析を加えることで尺度の構成を試み、その信頼性・妥当性についても検討する。

2-2. 本 調 査

2-2-1. 対象者及び調査時期

日本語学習者数が多く、量的データ収集の調査協力が得られたことから、本研究ではまずタイの大学で日本語を学ぶ学部学生384名(キングモンクット工科大学ラカバン校主専攻2・3年生53名、ウボンラチャタニー大学選択科目13名、ラチャパット大学アユタヤ校副専攻2・3・4年生58名、ブラパー大学副専攻3・4年生、主専攻2・3・4年生116名、ラチャパット大学テープサトリ校選択科目30名、ラチャパット大学カンチャナブリー校副専攻2・3年生87名)に対して調査を実施した。来日経験のある学習者の回答や欠損値を含む回答を除き、有効回答者数は、357名(男64名、女293名)であった。回答者は、大学で主専攻・副専攻・選択科目として日本語を学習する学部2~4年生である。調査は、1999年7月タイの各大学の日本語クラスにおいて、担当教師が各クラスで調査用紙を配布し、回収した。

2-2-2. 質問紙の構成と手続き

発音不安について聞く項目は、表1の4つの場面について具体的に挙げられた不安例を参考にし、場面①が20項目、場面②が20項目、場面③が13項目、場面④が5項目、合計58項目からなる質問紙を作成した。ただし、場面②については場面①と同じクラス場面であることから、設問を他の場面と分け、「日本国内でのクラス場面」を想像した上で回答してもらった。場面①③④については場面別にせずにランダムに配列して訊ねた。具体的な項目は以下の通りである。各項目の()内の数字は質問紙の項目番号を示す。場面①③④②の順で示す。

場面①: 母国での日本語クラスにおける発音・矯正場面(20項目)

- (1) クラスで発音矯正されると他の人に笑われないか不安である

- (5) クラスメートの前で発音矯正され、何度発音しても直らないと恥ずかしい
- (6) クラスメートが自分より発音がうまいかどうか気になる
- (11) クラスメートの前で発音矯正されると恥ずかしい
- (17) どうすれば発音がうまくなるかわからないから不安になる
- (29) クラスメートが自分の発音についてどう思っているのか気になる
- (31) クラスの中で自分だけうまく発音できないと恥ずかしい
- (32) クラスメートとあまり親しくないのに、発音矯正されると恥ずかしい
- (35) クラスメートに自分が下手だと思われていないか気になる
- (36) クラスの中で自分より発音が上手な学習者の発音を聞くと不安になる
- (12) クラスに自分より発音が下手な学習者がいると安心する
- (14) 発音矯正されてもどのように直したらいいのかわからないから不安である
- (20) 自分の発音が正しいかどうかかわからないから不安になる
- (21) 教師があまり発音指導をしないので不安になる
- (23) 発音矯正の際、教師の言われた通りに発音できるかどうか不安である
- (24) 自分の発音が上達するかどうか不安になる
- (27) どのように発音を学習すればいいのかわからないから不安である
- (37) 発音矯正されてなかなか直らないと、不安である
- (8) なかなか発音が上達しないと不安になる
- (10) 自分の発音のどこが悪いのかわからないから不安である

場面③: 日本国内での日本人とのコミュニケーション場面(13項目)

- (7) 日本人と日本語で話したとき、私の発音を通じなくて聞き返されはしないか不安である
- (2) 私は発音が下手だから、日本人と日本語で話すのが不安である
- (18) 日本人と日本語で話すと、自分の発音能力が問われるようで不安である
- (15) 日本人と日本語で話すと、発音を直されるかもしれないので不安である
- (3) 日本人と日本語で話したとき、私の発音が原因で重大な誤解が起きるのではないか不安である
- (9) 日本人と日本語で話したとき、私の発音を通じないと、今までの勉強が無駄に思えて不安になる
- (22) 日本人と日本語で話したとき、私の発音を通じるかどうか不安である
- (26) 日本人に何度も言い直しても発音を通じないとき、どうすればいいのかわからないので不安である
- (28) 日本人と日本語で話したとき、発音が下手だと思われぬか不安である
- (33) 日本人と日本語で話したとき、私の発音が原因で日本人を不快な気持ちにさせはしないか不安である
- (34) 日本人と日本語で話したとき、発音を通じないと、勉強不足を感じて焦る
- (38) 私は発音が下手だから、日本人と日本語で話したとき日本人に笑われぬか不安である
- (13) 日本人に発音を通じないとき、どうすればいいかわからないので不安である

場面④: 日本国内での外国人とのコミュニケーション場面(5項目)

- (30) 発音が自分より上手な学習者と話していると、自分の発音が下手なことがはっきりわかるので恥ずかしい
- (25) 発音が自分より上手な学習者と話していると、自分が下手だと思われぬか不安である
- (19) 他の学習者と日本語で話すと、自分の発音の誤りが明確にわかるので恥ずかしい
- (16) 日本人と話しても気にならないが、その場に自分より発音が上手な学習者がいると恥ずかしい
- (4) 発音が自分より上手な学習者と、日本語で話すのは恥ずかしい

場面②: 日本国内での日本語クラスにおける発音・矯正場面(20項目)

今あなたは、日本に留学して、ある学校の日本語のクラスで勉強しているとします。クラスには世界の国々からいろいろな国籍の外国人日本語学習者がいます。あなたがそのクラスで日本人教師に日本語の発音指導を受けている場面を想像してください。

- (1) 私は今まであまり発音矯正されたことがないので、もし矯正されたら恥ずかしい
- (2) よく知らない学習者の前で発音することは恥ずかしい
- (3) 私は発音が下手だから、発音矯正されたら恥ずかしい
- (4) どのように発音を学習すればいいのかわからないから不安である
- (5) 発音が上達するかどうか不安である
- (6) 他の国の学習者は私よりもっと発音が上手かもしれないと思うと不安である
- (7) 教師の言われた通りに発音できるかどうか不安である
- (8) 発音矯正されてもどのように直したらいいのかわからないから不安である
- (9) 私の発音について他の国の学習者に笑われたら恥ずかしい
- (10) 発音矯正されてもなかなか直らないと、不安である
- (11) 私だけ何度も発音矯正されるかもしれないと思うと不安である
- (12) 自分の発音が正しいかどうかわからないから不安になる
- (13) 今まで発音について先生に注意されたことがないので、もし発音矯正されたら自信をなくす
- (14) 他の国の学習者に私の発音が下手だと思われたら恥ずかしい
- (15) 教師が発音に厳しいかもしれないと思うと不安になる
- (16) 自分だけ発音がうまくできないかもしれないと思うと恥ずかしい
- (17) 自分の発音を通じるのかわからないから不安になる
- (18) どうすれば発音がうまくなるかわからないから不安である
- (19) 発音矯正されて他の国の学習者に笑われたら恥ずかしい
- (20) うまく発音できるまで何度も発音矯正されたら、恥ずかしい

質問項目の回答はいずれも5段階評定(各発音不安項目について、「とてもそう思う(5)」～「全く思わない(1)」)にした。その他、質問紙にはフェイスシートの他、「学習歴」(「半年未満(1)」～「3年以上(5)」)、普段日本語をどの程度使用しているかを示す「日本語発話量」(「よく話す(1)」～「全く話さない(4)」)、自分の発音能力に関する「自己評価得点」(「上手だととても思う(1)」～「全く思わない(5)」)についても併せて訊ねた。質問紙全体について、あらかじめネイティブ・スピーカーに依頼してバックトランスレーションを行った上で、タイ語版の質問紙を用意した。

3. 結果と考察

全項目について平均値と標準偏差を求めたところ、反応に極端な偏りは見られなかったため、全58項目について因子分析にかけた。主成分解で初期値1に設定して10因子を抽出した。6因子以降は負荷量の高い項目数が少ないことから削除し、さらに第1因子から第5因子までの項目で負荷量が低く、2つの因子に高い負荷を示す項目を除外して、再度同様に因子分析にかけた。固有値の減少傾向とバリマックス回転後の解釈可能性から、表2にあるような5因子を抽出した。性別、大学別(被調査者数の多い4大学間)、主専攻と主専攻以外(副専攻・選択科目として学習し

表2 発音不安項目についての因子分析結果

項 目	1	2	因 3	子 4	5	h ²
第1因子「発音学習スキルの欠如」($\alpha = .90$)						
(14) 発音矯正されてもどのように直したらいいのかわからないから不安である	.771	.106	.082	.119	.174	.657
(17) どうすれば発音がうまくなるかわからないから不安になる	.678	.134	.153	.223	.273	.626
(13) 日本人に発音を通じないとき、どうすればいいかわからないので不安である	.674	.144	.085	.164	.191	.546
(10) 自分の発音のどこが悪いのかわからないから不安である	.664	.164	.022	.019	.306	.563
(22) 日本人と日本語で話したとき、私の発音を通じるかどうか不安である	.663	.008	.063	.216	-.005	.491
(20) 自分の発音が正しいかどうかかわからないから不安になる	.660	.052	.114	.227	.208	.546
(27) どのように発音を学習すればいいのかわからないから不安である	.658	.037	.185	.330	.112	.590
(26) 日本人に何度も言い直しても発音を通じないとき、どうすればいいのかわからないので不安である	.601	-.005	.123	.235	.153	.455
(37) 発音矯正されてなかなか直らないと、不安である	.599	.059	.132	.335	.023	.492
(8) なかなか発音が上達しないと不安になる	.579	-.031	.155	.138	.283	.460
(9) 日本人と日本語で話したとき、私の発音を通じないと、今までの勉強が無駄に思えて不安になる	.533	.074	.071	.062	.434	.487
第2因子「日本でのクラス場面における他者評価」($\alpha = .92$)						
(14) 他国の学習者に私の発音が下手だと思われたら恥ずかしい	.103	.837	.189	.045	.111	.762
(19) 発音矯正されて他国の学習者に笑われたら恥ずかしい	.089	.810	.229	.025	.108	.729
(16) 自分だけ発音がうまできなないかもしれないと思うと恥ずかしい	.086	.777	.226	.064	.091	.675
(9) 私の発音について他国の学習者に笑われたら恥ずかしい	.137	.769	.263	.091	.007	.688
(20) うまく発音できるまで何度も発音矯正されたら、恥ずかしい	.041	.749	.225	.088	.149	.644
(11) 私だけ何度も発音矯正されるかもしれないと思うと不安である	.117	.671	.347	.083	-.013	.592
(13) 今まで発音について先生に注意されたことがないので、もし発音矯正されたら自信をなくす	.066	.626	.243	.242	.059	.517
(6) 他国の学習者は私よりもっと発音が上手かもしれないと思うと不安である	.042	.617	.344	.211	.044	.547
(15) 教師が発音に厳しいかもしれないと思うと不安になる	-.044	.528	.241	.165	.109	.377
第3因子「日本でのクラス場面における発音学習スキルの欠如」($\alpha = .92$)						
(5) 発音が上達するかどうか不安である	.140	.237	.789	.064	.020	.702
(7) 教師の言われた通りに発音できるかどうか不安である	.092	.242	.768	.083	.021	.663
(4) どのように発音を学習すればいいのかわからないから不安である	.156	.193	.751	.082	.018	.632
(8) 発音矯正されてもどのように直したらいいのかわからない	.127	.297	.748	.101	.032	.675

表2 (続き)

項 目	1	2	因 3	子 4	5	h ²
いから不安である						
(17) 自分の発音を通じるのかどうかわからないから不安になる	.137	.309	.722	.042	.041	.639
(18) どうすれば発音がうまくなるかわからないから不安である	.183	.336	.721	.012	.098	.676
(12) 自分の発音が正しいかどうかわからないから不安になる	.062	.290	.664	.025	.080	.536
(10) 発音矯正されてもなかなか直らないと、不安である	.127	.416	.635	.140	-.058	.615
第4因子「他者評価」($\alpha = .91$)						
(35) クラスメートに自分が下手だと思われていないか気になる	.187	.136	.032	.720	.269	.645
(29) クラスメートが自分の発音についてどう思っているのか気になる	.165	.075	.058	.691	.335	.626
(32) クラスメートとあまり親しくないので、発音矯正されると恥ずかしい	.078	.151	.034	.673	.339	.598
(36) クラスの中で自分より発音が上手な学習者の発音を聞くと不安になる	.282	.141	.039	.644	.215	.562
(30) 発音が自分より上手な学習者と話していると、自分の発音が下手なことがはっきりわかるので恥ずかしい	.292	.139	.061	.601	.399	.629
(38) 私は発音が下手だから、日本人と日本語で話したとき日本人に笑われないか不安である	.371	.120	.177	.570	.015	.509
(28) 日本人と日本語で話したとき、発音が下手だと思われないか不安である	.426	.111	.147	.567	.142	.558
(33) 日本人と日本語で話したとき、私の発音が原因で日本人を不快な気持ちにさせはしないか不安である	.375	.130	.091	.565	-.004	.485
(25) 発音が自分より上手な学習者と話していると、自分が下手だと思われないか不安である	.255	.026	.067	.558	.436	.572
(31) クラスの中で自分だけうまく発音できないと恥ずかしい	.355	.225	.061	.529	.300	.550
第5因子「自他比較」($\alpha = .86$)						
(6) クラスメートが自分より発音がうまいかどうか気になる	.171	.009	.004	.269	.754	.671
(5) クラスメートの前で発音矯正され、何度発音しても直らないと恥ずかしい	.268	.103	.031	.155	.742	.658
(11) クラスメートの前で発音矯正されると恥ずかしい	.194	.139	.044	.262	.731	.662
(1) クラスで発音矯正されると他の人に笑われないか不安である	.094	.104	.050	.153	.698	.532
(4) 発音が自分より上手な学習者と、日本語で話すのは恥ずかしい	.335	.038	.062	.070	.669	.570
(12) クラスに自分より発音が下手な学習者がいると安心する	.152	.076	-.070	.270	.543	.401
(16) 日本人と話しても気にならないが、その場に自分より発音が上手な学習者がいると恥ずかしい	.149	.063	.085	.333	.449	.345
因子負荷量の2乗和	6.00	5.65	5.09	4.86	4.57	26.16
寄与率 (%)	13.3	12.6	11.3	10.8	10.2	58.1

ている学習者)の間で同様の因子分析を行った結果、因子構造にあまり差が見られなかったため、以下の分析は全体(N=357)について行ったものである。以下、主に負荷量の高い項目から因子を解釈した。なお、表中項目の前の()の数字は項目番号、その数字に下線がついている番号は場面②の「日本国内でのクラス場面」を想像して回答してもらった項目を示す。

まず、第1因子はクラスや日本語によるコミュニケーション場面において、発音上の問題が生じた場合に、自分の発音についての正誤判断や発音能力、その具体的な対応策・学習手段がわからないことによる不安であり、「発音学習スキルの欠如」と考えた。第2因子は、日本国内のクラスを想像した場面②からの項目で、日本でのクラス場面で他の学習者から自分の発音についてどのように評価されるのかを予測することによる不安と捉え、「日本でのクラス場面における他者評価」と解釈した。第3因子も、同じく日本でのクラス場面を具体的に想像した場面②からの項目で、ちょうど第1因子「発音学習スキルの欠如」と内容的に対応していることから、「日本でのクラス場面における発音学習スキルの欠如」と捉えた。第4因子は、第2因子「日本でのクラス場面における他者評価」と内容的に対応し、日本ではなく、現在のタイでのクラス内やコミュニケーション場面において、他の学習者や日本人から自分の発音についてどのように評価されているのかについて予測することによる不安と捉え、「他者評価」と考えた。第5因子は、他の学習者の存在を意識し、自分の発音能力と比較することに起因する恥ずかしさや不安と捉え、「自己比較」と解釈した。

表1では、発音不安が生じる場面は4つに分類されたが、本調査の結果では、タイ国内か日本国内かの2つの場面に大きくまとめられた。今回、日本国内での3つの場面がまとまる結果になったのは、対象者が日本国外のタイで学習する学習者であったことから、日本国内での日本語による具体的なコミュニケーション場面を想像しにくかったものと考えられる。不安要因についても、4つの各場面によって様々な発音不安要因が見られたが、本調査では自分の発音能力・正誤判断能力・改善能力の不足から生じる「発音学習スキルの欠如」、誰に評価されるかという評価者の属性よりも、評価されること自体による不安である「他者評価」、他の学習者の存在を強く意識し、発音能力を比較することに起因する「自己比較」の3つに大きく集約された。このことは、全体として先の予備調査において示唆された発音不安を感じる学習者の傾向が、本調査による因子分析結果においても明示されたものと言える。さらに各要因についても、「発音学習スキルの欠如」については Price (1991) が第二言語でのコミュニケーション不安の高い学習者は第二言語による発音がうまくできないと考える傾向を指摘し、「他者評価」については Horwitz, Horwitz & Cope (1986) など第二言語不安の構成要素の一つとして「否定的評価に対する不安」を挙げ、「自己比較」については Bailey (1983) など他の学習者と比較することで自意識が第二言語習得を阻害する可能性があることを指摘していることから、本調査項目は発音学習に特定の関わる発音不安項目として妥当であることを示していると考えられる。

表3 「日本語発音不安尺度」案

タイ国内版	
下位尺度	項目
1: 発音学習スキルの欠如	(14) (17) (13) (10) (22) (20)
4: 他者評価	(35) (29) (30) (38) (28) (25)
5: 自他比較	(6) (5) (11) (4) (12) (16)
来日直後の日本国内版	
下位尺度	項目
2: 日本でのクラス場面における他者評価	(14) (19) (16) (9) (20) (11)
3: 日本でのクラス場面における発音学習スキルの欠如	(5) (7) (4) (8) (17) (12)

表4 各下位尺度相関と学習歴・日本語発話量・自己評価得点との相関

	下位尺度 1	下位尺度 2	下位尺度 3	下位尺度 4	下位尺度 5	日本語 学習歴	日本語 発話量
1 発音学習スキルの欠如							
2 日本でのクラス場面における 他者評価	.272**						
3 日本でのクラス場面における 発音学習スキルの欠如	.306**	.603**					
4 他者評価	.610**	.300**	.286**				
5 自他比較	.547**	.237**	.162**	.647**			
日本語学習歴	.116*	.019	.061	.039	.018		
日本語発話量	.076	-.033	-.004	.052	.017	.244**	
発音自己評価	-.057	.011	.024	-.009	.038	-.154**	-.261**

* p < .05 ** p < .01

よって、少なくとも本調査の対象となったような来日経験のないタイ人学習者については、タイ国内で学習する場合、第1・4・5各因子項目から、来日してクラスに入る前のタイ人学習者には日本国内場面である第2・3各因子項目から、それぞれ項目を選定することで発音不安尺度を構成できるものと考えられる。そこで、各因子項目から、内容的な妥当性、因子負荷量、項目数のバランスの観点から、6項目ずつを選定し、6つの下位尺度全30項目からなるような表3の「日本語発音不安尺度」案を作成した。()内の数字は表2で示した項目番号と一致する。各下位尺度の信頼性係数(α)は、0.6~0.7にわたり、概ね内的整合性は高いと言える。

表4は各下位尺度間相関と、被調査者の「学習歴」「日本語発話量」「自己評価得点」との相関を示したものである。各下位尺度間相関は、どれも有意に高い。特に、タイ国内場面の第1・

4・5 因子間 ($r = .547 \sim .647$ $p < .01$), 日本国内場面の第 2・3 因子間 ($r = .603$ $p < .01$) では高い相関が認められ, この尺度が発音不安という単一の傾向を測定していることを示している。また, この結果から, タイ国内で不安を感じている学習者は, 来日してクラスに入り, 日本語を学習する場面においても同様に不安を感じるであろうと予想していると考えられる。

さらに, 学習歴と発話量 ($r = .244$ $p < .01$), 学習歴と自己評価得点 ($r = -.154$ $p < .01$), 発話量と自己評価得点 ($r = -.261$ $p < .01$) の間でそれぞれ低い有意な相関が認められた。この結果から, 学習歴が増すにつれて, 語彙や文型も増えるため, 自然に発話量も増えると言える。同時に, 発話量が増えることによって, 実際に自ら日本語を口に出して話し, コミュニケーションを試みることにより, 発音を自己評価する機会も増え, そのような経験が増えれば, 自分の発音についても次第に自信がついていくものと考えられる。学習歴, 発話量, 自己評価得点との関係は以上のように考察できる。しかし, 1 例を除いて, 学習歴, 発話量, 自己評価得点とも各発音不安因子との間に有意な相関は認められなかったことから, 単に学習段階が進めば, 不安が低下していくとは言えず, やはり何らかの教育的配慮が教師には必要であると言える。

この例外とは, 学習歴と第 1 因子「発音学習スキルの欠如」との間に見られたかなり低い有意な相関 ($r = .116$ $p < .05$) である。これは, タイ国内で学年が進み学習歴が増すにつれて, 「発音学習スキルの欠如」による不安は低下していく可能性を示している。これは, 日本語学習が進めば, 発音学習に関するスキルがないことによる不安が低下する, つまりスキルが身についていくことを示しているのだろうか。この点について, 本調査を実施した大学のある担当教師によれば, 学習段階に応じた継続的な発音指導を具体的に行っているという回答は得られず, 十分な指導はできていないのが現状ということであった。さらに, タイの大学などの日本語教育機関における音声教育や学習者の発音学習の現状に関する調査研究を行った千葉 (2000) においても, 発音指導については同様の現状が報告されていることから, 逆に初級段階以降, 具体的な発音指導自体がなされないことで不安が生じなくなったのではないかと考えられる。この点については今後さらに検討が必要である。

その他, 各因子の尺度得点(平均値)について, 性別, 大学別(被調査者数の多い 4 大学), 主専攻と主専攻以外(副専攻か選択科目として日本語を学習している場合)をそれぞれ要因とする分散分析を行った。どの属性においても有意差は認められなかったことから, 本調査結果に関する限りにおいては性別・大学・専攻による発音不安への影響は見られなかった。しかし, 発音指導の程度や指導法などによる影響は十分考えられることから, 調査対象を広げた検討が必要である。

4. 日本語教育への応用

本研究では, 日本語発音・指導・矯正場面における学習者の発音不安の実態を明らかにするた

めに、まず日本国外で学習する来日経験のないタイ人大学生を対象として調査を行った。その結果、タイ国内では日本語による具体的なコミュニケーション場面を想定しにくいいためか、発音不安は現在のタイ国内場面と日本でのクラスを想像した場面の大きく2つに分類され、場面による影響はあまり見られず、タイ国内場面での発音不安がそのまま日本国内場面に移行する傾向が見られた。

具体的な発音不安要因としては大別して、発音学習・改善のためのスキルがないことによる「発音学習スキルの欠如」、他者による評価や存在を意識したり、比較したりすることによる「他者評価」「自他比較」に起因する発音不安を抱えていることが示唆された。つまり、学習者は自身の発音能力に不足を感じているだけでなく、自身の発音自体が正しいのかどうか独力で判断できず、それをどう改善していけばいいのかわからないことによる不安を抱いている。しかし、十分に効果的な発音指導が行われていれば過度の不安は生じないと考えられる。教師が「発音学習スキルの欠如」による発音不安を常に把握し、このような学習者の問題点に対処し、過度の不安を生じさせない、あるいは取り除くようなスキル・トレーニング、つまり学習段階・場面に応じた継続的な発音指導をすることが重要であると考えられる。

他者に評価されることや他者の存在を気にしたり、他者との発音能力を比較することによる不安については、今後クラスにおける実践的な検討が課題となるが、方向性としては3つ考えられる。まず、学習者個別の不安要因を把握した上で、他者から切り離して個別指導を行うなど、他者の評価や存在に起因する不安自体を回避する。逆に、学習者が相互に発音を評価し合う他者評価活動など、学習者相互の評価を明示し合うことによって、直接不安要因である評価の情動的側面をクラス活動として効果的に利用する。そして、教具・教材による視覚的な効果やゲーム性の導入、発音上の誤りや発音の重要性、発音学習方法についてのディスカッションなど、多様な活動を用意し発音学習に変化を持たせることによって、クラスや学習者の発音学習そのものに対する意識・動機づけを強化することである。

しかし、こうした適切な指導のためには、まずは発音不安を測定し、学習者を把握する尺度が必要となるが、今回の調査項目は発音不安尺度項目として妥当であることが示唆された。そこで、因子分析の結果から、項目を選定し、場面別に現在のタイ国内版と来日直後の日本国内版それぞれの「日本語発音不安尺度」案(5下位尺度・30項目)を提示した。各下位尺度間相関も高く、信頼性係数も概ね高いことから、本尺度の内的一貫性は高いものと考えられる。また、性別、大学別、専攻別について、因子構造は概ね同様であったため、どの学習者にも区別なく利用できるものと考えられる。

本尺度の音声教育研究への応用としては、従来の指導法や新しく開発した指導法・教材の効果を教室において実践的に検討する際に、学習者要因の一つとして発音不安との関係を検討することができる。さらに、発音学習過程の実態把握のために、学習者の動機づけやストラテジーなど、

発音学習に影響を与えるその他の学習者要因や習得度との関係についても分析することが可能となる。

今後は、まず本尺度の汎用性、あるいは母語別尺度の可能性の検討のために、タイ国内だけでなくタイ以外の学習者について同様の調査を行うことが必要である。本調査では、「来日直後」における発音指導の重要性の観点から、特に来日経験のない日本国外の学習者を対象に調査を行った。しかし、来日してから発音不安がどのように変化するかについては来日後の学習者を対象にした縦断的実態調査を行った上で、各段階に応じた尺度の検討が必要になる。

また、国外においても発音指導が十分に実施されていないという現状が示唆された。そのため、学習者は具体的な発音学習や実際の日本語によるコミュニケーション場面についての具体的なイメージを想像すること自体が難しく、発音不安についても国外で学習する限りにおいては切実な問題になっていないように思われる。しかし、そのような学習者も来日してからは、場面によって様々な発音不安が生じると予想される。日本語が国際的なコミュニケーションの手段として国外でもその使用頻度が増していけば、国外においても音声指導の教育的位置付けは高まっていくものと考えられる。さらに、国外での学習者が増え、国外に広がった日本語教育の現状に鑑み、日本国内だけでなく国外における日本語教育において、音声コミュニケーションの基礎となる音声教育がもっと重視され指導されるべきである。今後とも、国内外の学習者に対する調査を継続し、発音学習に関する実態把握と信頼性・妥当性の高い尺度を検討していくことが重要であろう。

謝 辞

調査に御協力いただきました先生方、学習者の方々、特に元ブラパー大学日本語講師の藤田裕子先生に厚く御礼申し上げます。

引 用 文 献

- 池田伸子(1997)「外国語学習不安と成人学習者の日本語習得」『留学生教育』2, 121-130頁, 留学生教育学会。
- 岩男寿美子, 萩原 滋(1988)『日本で学ぶ留学生——社会心理学的分析』, 勁草書房。
- 上野田鶴子(1992)「音声・音韻 概説」, 『日本語教育事典』, 7-8頁, 大修館書店。
- 大坪一夫, 水谷 修(1971)『日本語教育指導参考書 I 音声と音声教育』, 文化庁。
- 小河原義朗(1993)「外国人の日本語の発音に対する日本人の評価」, 『東北大学文学部日本語学科論集』3, 1-12頁。
- (1999)「外国人日本語学習者の日本語発音不安」, 『東北大学文学部言語科学論集』3, 13-24頁。
- 河野俊之(1999)「毎日の音声指導法」, 『月刊日本語』8, 24-31頁, アルク。
- 倉八順子(1994)「スピーチ指導及びスピーチについてのフィードバックがスピーチ技術と学習意欲に及ぼす効果」『日本語と日本語教育』23, 63-77頁, 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター。
- 谷口聡人(1992)「音声教育の現状と問題点——アンケート調査の結果について」, 『シンポジウム日本語音声教育——韻律の研究と教育をめぐる』, 20-25頁, 凡人社。

- 千葉真人 (2000) 『タイ人日本語学習者と日本人教師の意識の比較——発音学習の視点から』, 東北大学文学研究科修士学位論文.
- 元田 静 (1999) 「初級日本語学習者の第二言語不安についての基礎的調査」, 『日本教科教育学会誌』 21, 45-52 頁.
- Bailey, K. M. 1983. Competitiveness and anxiety in adult second language learning: Looking at and through the diary studies. In *Classroom oriented research in second language acquisition*, ed. Seliger and Long. Newbury House.
- Daly, J. 1991. Understanding communication apprehension: An introduction for language educators. In *Language anxiety*, ed. E. K. Horwitz and D. J. Young. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Horwitz, E. K., M. B. Horwitz, and J. Cope. 1986. Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal* 70: 125-32.
- Horwitz, E. K. and D. J. Young. 1991. *Language anxiety: From theory and research to classroom implications*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Leary, M. R. 1983. *Understanding social anxiety: Social, personality, and clinical perspectives*. Sage. [生和秀敏(監訳) 1990 対人不安 北大路書房]
- MacIntyre, P. D. and R. C. Gardner, 1988. *The measurement of anxiety and applications to second language learning: An annotated bibliography* (Research Bulletin No. 672). London, Ontario: The University of Western Ontario.
- . 1989. Anxiety and second-language learning: Toward a theoretical clarification. *Language Learning*, 39: 251-75.
- . 1994. The effects of induced anxiety on three stages of cognitive processing in computerized vocabulary learning. *Studies in Second Language Acquisition* 16: 1-17.
- Price, M. L. 1991. The subjective experience of foreign language anxiety: interviews with high anxious students. In *Language anxiety*, ed. E. K. Horwitz and D. J. Young. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Rivers, W. M. 1981. *Teaching foreign-language skills*. Chicago: University of Chicago Press. [天満美智子・田近裕子(訳)(1987) 外国語習得のスキル——その教え方, 研究社出版]
- Scovel, T. 1978. The effect of affect on foreign language learning: A review of the anxiety research. *Language learning*, 28 (1): 129-42.
- Stevick, E. 1978. Toward a practical philosophy of pronunciation: Another view. *TESOL Quarterly* 12 (2): 145-50.
- Tobias, S. 1986. Anxiety and cognitive processing of instruction. In *Self-related cognition in anxiety and motivation*, ed. R. Schwarzer. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Young, D. J. 1986. The relationship between anxiety and foreign language oral proficiency ratings. *Foreign Language Annals* 19: 439-45.